

日本とイエスの顔

井上洋治

〈第一 日本人の心で読む聖書〉

- 日本人とキリスト教
- イエスの教えを日本語であらわすこと
- ◎日本人の生活感情のうちうけとめること

① (ことばといのち)

わたしはゆるさている——しかし、それでいいんだよ

新約聖書はまず第一に私たちへの問いかけの書物であり、私たちがどうしたら永遠の生命に至れるかを説いた実践指導の書物であるといえます。

言葉というものが、絶えず流れているいのちの世界を、生きとし生けるものを支えている根源としての何か、——私はこれを無とよんでもよいと思うのですが、——を、あたかも整然と区別されたものやことのそれぞれ独立した集合であるかのように人間に示す虚構性を本質的に持っているものであるなら、私たちがものの真のすがた、いのちにふれようと思う時には、ものと自分との間に立ちはだかっている言葉というものを乗り越えて[本マ]、その真のすがたに接するという行為が必要です。

真理を把握するということは、覆いを取り去って、ほんとうのもの姿をとらえるということになるでしょう。

◎「万物に内在し、万物を包みこむ神」

(ヨーロッパの考え方)

主体が客体について知る

(日本の考え方)

を知る → 主体≠客体も共に包みこんでしまう根源的な生命力ともい
うべき何かについての関心 —— 神聖なる「無」

日本文化の底を流れてきたものは、つねにこの”生きとし生けるものをささえている根源的な何か”を知り体験によってとらえようとするものであったといえると思います。

(この何かは、決してについて知ることのできるようなものではなく……)

日本の伝統的精神風土においては、ものの真のすがたをとらえるということは、ギリシャ以来のヨーロッパ思想のごとく、アレテイヤ、すなわち、対象の覆いを理性によってとり去るということではなくて、むしろ主体の側にかかっている覆いを、行為によって取り去って、根源の何かを現前させるということであったといえる

佐伯の

〈行為によって、知る〉ということ

[日本人としての聖書の理解法]

聖書、特に新約聖書が行為を要求する実践的指導の書であり、私たちに永遠の生命への道を説きあかしてくれる書であるなら、一念発起してその教えに従おうと決意し、行為を起こさないかぎり、ほんとうの意味でイエスの教えをわかることはできない。

イエスの教えを、真に理解しようとする人は、字づらを超えて、イエスを生かし、また私たちをも現に生かしている実相——永遠の生命(場)——の体験を、己のものとしなければならない。もっと正確にいうならば、その実相の働きによってとらえられるということではなければならない。

科学(合理主義)の台頭によって、うたわれた、
「神の死」は、神をも一つの客体としてみたところに発する

②聖書を読むにあたって

- 文学類型ということに注意すべき
- 聖書は何よりもまず、当時の人たちの信仰の告白
信仰の宣言の書である

○聖書を学問的真理にすぐ結びつけようといういっさいの態度は、作者の意図した文学類型を、間違って受けとったからにはほかならない。

「小さな己れの我を絶対化してしまい、その結果、他者をそのままの姿で受けとめることのできないようになってしまった閉ざされた姿——この生命の汚れをキリスト教は原罪という名で呼んできた。」

福音＝”善きおとずれ””善いしらせ”

「イエスの福音を受け入れて生きることによって、イエスを知り、神の愛を知った(神の愛についてではなく)からといって、この世の哀しみや苦しみがなくなるわけのものではない。---表面は、波立っていても、いつも湖の底が深い、静けさをたたえているように、イエスの約束した歓びと平和と、自由とは、もっと次元のちがった心の奥にひろがっていくものなのだ」

—ちやうど私たちが飛んで泣いても笑っても、この大きな、大地の外に出ることがないように、私たちは大地のように大きな、暖かな神の掌の中で、生き育っているのだというやすらぎと、勇気と、希望、それこそイエスが、死をかけて伝えようとしたものだ。

③イエスの生涯

ただひたすら慈愛〔本マ〕なる神を父として人々に示し、みずからも愛に生き愛に死んだイエスの生涯は、やはりそれだけの歴史的・風土的準備を持っていた、といえる

—ガリラヤの風土のすばらしさ

風土が人間及び文化に与える影響(『風土』)

イエスの育ったナザレ、及びガリラヤ	←→	エルサレムを中心とするユダ
四季のやわらかい変化		
		荒野

日本←→ヨーロッパ

「砂漠的風土(ユダ)とはまったくといってよいほど異った風土のなかに、しかも外国の支配を数百年も受け続けてきた間に、ガリラヤのユダヤ教が、エルサレムを中心とする正統的後期ユダヤ教とはかなりちがった方向を蔵しはじめていたということは想像に難くない。

旧約 と 新約 ……非連続の要素を含む質的発展

ユダヤ教 キリスト教
 (一民族宗教) (普遍宗教)

○旧約と日本の古事記の類似——荒唐無稽

「文化現象としてはつねにある特定の文化と結びつきながら、しかも本質的にはそれを超えているというところにまさにキリスト教の特質がある。

◎ユダヤ的キリスト教からギリシャ・ローマ的キリスト教へ、と発展

『護教論』 ユスチヌス

明治以後の日本

「キリスト教だえは文字を媒介にして入ってきたのではなく、西欧のものの考え方や文化の歴史をその血の中に受けついでいる、宣教師という生きた人間を媒介として、日本に入ってきたのでした。したがってキリスト教だけはこれを日本的に受けとめるということが許されずヨーロッパ人が受けとめてきた、その西欧的形態のまま、日本人はこれを受けとめることを強いられた。

遠藤周作「死海のほとり」「イエスの生涯」

—日本の精神風土にキリスト教が、ガッチリくみ合った、画期的作品

〈第二 イエスの教え〉

④イエスの神・アバ(父よ)

→実際に一度その人と会って、その人と語り合い、いのちのふれあいの場にお

いて、その人を知ったとき、はじめてその人を知ったとすることができる(体験的認識)

神は普通の意味での、あるとかないとかいう領域を超えている。
(神は客体ではない)

“われわれの存在そのものの根底である神”

現代の日本人である私たちが、神や神の国や天地創造といったようなキリスト教の教えを深く自分のものとするためには、さらに一歩掘り下げて、東洋に伝統的な“無”という考え方を理解することが、ほとんど不可欠であるとさえ思われる

“神は言語を絶し知解を絶する。大に非ず小に非ず、同時に同一に非ず、類化に非ず区別に非ず、止に非ず動に非ず静に非ず、また力に非ず、無力に非ず、一に非ず他〔本マ〕に非ず、神性に非ず至福に非ず。神はまた存在する何ものにも非ず、存在せざる何ものにも非ず。暗に非ず明に非ず、真に非ず偽に非ず、肯定されうべくもなく、また否定されうべくもなし。”

カタファティック〔本マ〕な神学

ロシアの神学者ウラジミール・ロスキ

「西ヨーロッパの神学では、つねに神についてかたらんとする神学がその主流を占めていたのに反して、東方神学では一貫して神についての概念や言葉をつくりだすことをいっさい拒否する神学の態度を保ってきた」といっている。

アポファティックな神学

イエスにとって神は何よりもまずアバ(父よ)と呼びうるかたでした。アバ(父よ)という言葉は、イエスにとって、その深い神の子の自覚と体験からうまれた言葉なのです。

そうとしか言いあらわしようのない、深い生の体験の表現なのです。

神は、それなしには私たちは私たちでありえず、生きとし生けるものはみな、それぞれのものたりえない根源でありながら、しかし同時に限りなく深く、私たち

ひとりびとりに愛してくださる愛の父である、というのがイエスが私たちに示した神であり、神の愛にいっぱいに見たされたイエスだけが、示しうる神のすがたなのであった。

イエスの示す神は、あのガリラヤ湖にふさわしく、愛とやさしさをもって、すべてを暖かく親のように包んでくださる神なのでした。

アバ → 父親に対する親称
(日本語のパパ、おとうちゃん)

何よりもまず、”聖なる、近づき難き神”であったユダヤ教の神に対し、アバと呼ぶる神、それがイエスが示した神であった。

イエスにとってアバである神が、同じように私たちにとってもアバなのだ、ということが、イエスが身をもって私たちに教えようとした、もっともたいせつなことの一つであった

イエスはいつも変わらない暖かな、やさしいまなざしで、神の無量な、親のような、深い愛を説き続けた。

イエスが神にむかって呼びかけたアバという言葉の中には、主——客未分における、この深い愛の体験があった。

イエスは、あらゆる意味で完全に独り子であった。

父なる神の姿——母の愛 (ルカ15, 11~32)
(ルカ15, 4~6)

⑤神の国・永遠の生命 (この二つは、同字義)

神の国は、イエスのなかにすでに到来しており、イエスの全生活はすでに神の愛に完全にみたされている、——

神の国は完全なかたちですでにイエスのうちに実現していた。

神の国は、永遠の生命は、私たちがその外に立って眺めることのできるようなものではなく、私たち自身が決してその外に立つことのできない、私たちをも生きとし生けるものをも、すべて包みこんで流れてゆく根源の大生命の流れともいえましょう。

日本文化の流れが無意識のうちに神の国を求め続けてきた。

このガラーンとした、無限定な無を……単に無の深淵としての虚無としてではなう、まさに光あるものとして、われわれを真に生かす大生命としてわれわれに体験せしめるところにイエスの教えの意味がこめられている

「主-客を超えたガラーンとした、スツカラカンの何かが、 pneuma ではなくて、単に見えない風というのではなくて神の息—— pneuma (聖霊)——であり神の力であるということ、どうしたら私たちが体験し知ることができるかを示すところに、イエスの教えの意味があり、それを可能にさせるところにイエスの生涯の意味があったと思う。

↓

「私たちが、幼子の心、童心に立ち返って、神をアバとして、信頼してゆくところに、このスツカラカンを単なる風や無としてではなくて、神の力、神の国として体験しうる秘訣がある」

アバ(父よ)の言葉——体験の叫びとしての言葉
—それなしには自分がもはや自分ではない根源的な何かへの深い呼びかけの叫び

日本人の美意識 — 黄昏の美意識 — 哀愁, 郷愁
(哀しみ)

私たち生きとし生けるものをそれぞれの場において、支え生かしている根源的な何か、これをイエスは神の国、とか pneuma とかいう言葉で叫んだ。

(風・霊・息)

「人間の側から、いわばこちら側から、体験的に無とか空とかという言葉でしかいいあらわしえない、概念化も対象化もできないこの根源的な何かが、神の側

永遠の生命一場になりきったイエスの教えなしには、人間には無としてしか体験し表現しえない永遠の生命といった原事実が、イエスの教えを生きることによって初めて、神のロゴス、神のロゴス〔本マ〕、神の愛の一つの合図として受けとめられるようになる

新約聖書は、無としてしか言いあらわしえない原事実が実は神の愛の語りかけ、合図という構造を持つものであることを私たちに気づかせてくれる書であるといえる。

この無としかいいようのない場の構造が、実は三位一体的構造を持つものであり、この場の働きかけが、すなわち聖霊による復活したキリストの愛の働きかけであるというのが、イエスの私たちに示した真理だった。

⑦悲愛(アガペー)

アガペーの愛は相手と同じ所に立って、無心に”共に喜び共に泣く”愛であり、相手の弱さやみじめさを最終的には己の上に素直に荷う愛であるといえる。もし、”悲”という字が、本来は人生の苦にたいする呻きを意味し、共に苦しむおもいやりを意味するものであれば、アガペは悲愛とでも訳するのがいちばんふさわしいと思います。

イエスの姿勢は、あくあるべしという規準をもって、人を審くまえに、その人が哀しみと孤独のうちに背負って来た、十字架を受けとめ、罪人を招くためであるその人の心をそのあるがままの姿において感じとめる姿勢である。

イエスは、私たち人間がどうゆうものであるかということは骨の髄まで知っていた。その上でなおあの崇高な悲愛アガペーを生き、かつ説いたのだと思う。そして、むしろその点にこそ、イエスがもっとも示したかった信仰の秘密がかくされている。

イエスにとっては、律法よりも神殿よりも犠牲よりも、もっとたいせつなものがあつた。それは、もっとも小さな一人の人間のいのちを、心を、いのちとし心として、

たいせつにすることでした。ひとりびとりの人間がみな荷って歩んでいる生の重荷を、哀しみを、共感することであり、共に背負って歩むということだった。

イエスにとって、隣人を愛するということは、その人の隣人になるということにほかならなかった。

ヨハネ第一の手紙4章7～20節

——田舎道のお地藏さま

おさなご

⑧幼子の心・無心

もっとも重大なことは、イエスの死の十字架の上では奇跡はなかったということである。

童心に立ち返る

祈り → ^{えしん}回心する＝悔い改める ⇒ 私たち自身の全存在を神の方向へ向け直し、神の配慮にあずけきる、

下駄をあづける〔本マ〕

——下駄を神にあずけきってしまおうと決心した以上は、安心があたえられるか、迷いがあたえられるかさえ、私たちは神に委ねてしまうべきものだ。

イエスと同じように、イエスと一緒に、もし私たちが心の底から”御旨のままになれかし”（どうぞお望みのようになさってください）と祈ることができたなら、どうしようもない我というものがストーンと落ちて、広い自由な向う側へスーツとでることが、できるでしょう

⑨悲愛の突入

イエスの最後の晩餐—

祈りができないのならそれでもよい、悲愛の心がないのならそれでもよい、泥まみれの生活から抜け出られないのならそれでもよい、ただ手を合わせ、て私の方を向きなさい。私はアバからいただいた、私のすべてをこめて、私

の方からあなたの中へ、飛び込んでいってあげる——それがイエスの思いであった。カトリック教会の秘跡とよぶもののなかには、このイエスの思いのすべてがこめられている。

“十字架の愚”というパウロの言葉があるが、(コリント第一書一章17以下)疑いが湧いて来たら、その疑いをひとまず心の風呂敷でつつんでしまい、自分の罪や汚さや自己嫌悪が気になったら、それも心の風呂敷でつつみこみ、とにかく童心に立ち返って無心に両手を合わせて、聖体にこめられた、イエスの来る方を受けとめること、それが永遠の生命一場に支配され、悲愛の喜びに導かれるためにもっともたいせつなことだ。

信仰生活とは、ひつきょう掌を合わせることに始まり、掌を合わせることに終るのだ。

「わからないながら従うという姿勢」